



## 馬耳東風

消毒の先駆者といえど誰しもリスター (Joseph Listet, 1827-1912) の名を思い浮かべるだろう。彼の名を冠した口中消毒剤が市販されていることから彼が消毒の鼻祖として広く認知されていることがわかる。しかし彼自身が、消毒の真の先駆者は、センメルワイス (Ignaz Semmelweis, 1818-1865) である、と言っていたことを忘れてはならない。

センメルワイスは、ハンガリア人の医師でウイーン総合病院産科に勤務していた。この病院では産科は2つに分かれ、第1産科は医師、第2は助産婦の教育をしており、お産の介助も第1は医師が、第2は助産婦がしていた。当時産科では産褥熱が問題であったが、その発症率は医師が介助する第1の方がはるかに高かった。また第1では、分娩後死亡した人の病理解剖を行っていたが、助産婦が介助をする第2では病理解剖は行われていなかった。そして第1では、医師が病理解剖した後、そのまま診察やお産の介助をすることが普通に行われていたという。

ある時センメルワイスの友人の法医学者が、産褥熱で死亡した産婦の病理解剖をしていた際、誤って自分の指を傷つけてしまった。しかし彼はそのまま解剖を続けたところ、数日後産褥熱と似た症状で死亡してしまうという事件があった (1847)。このようなことからセンメルワイスは、目には見えないが臭いのする死体の粒子が産褥熱の原因であると考えた。そこで彼は脱臭作用のあるさらし粉溶液で手を洗って死体の臭いを取り除いてから診察やお産の介助をするよう医師に義務付けたところ、第1産科の産褥熱による死亡率は12.24%から2.38%へ激減し、第2とほぼ同じになった。しかし彼のこの病院

での任期が切れてハンガリーに帰国し、医師たちが面倒な手指の洗浄をしなくなると、産褥熱による第1産科の妊婦の死亡率はまたもとの高率に戻ってしまった。一方帰国した彼が勤務した病院の産科病棟では、手と医療器具を洗浄することにより産褥熱による死亡率は0.85%まで低下したことから、この方法は瞬く間にハンガリー国内に広まった。

しかしこのような実績にもかかわらず、彼の考え方はヨーロッパ全土には広く普及しなかった。彼は1861年に「産褥熱の病因、概念、および予防法」と題した本を出版したが、国外での書評はどれも否定的なものばかりだった。彼は公開書簡の中で激しく反論したが、ドイツで開催された学会では、彼の学説は講演者にことごとく否定されたという。このような対応の大きな理由として、医師が産褥熱の原因となっている粒子を媒介しているという主張に対する強い反発と当時の医学知識が挙げられよう。すなわち、自分たち医師の職業はきわめて神聖であり、手がよごれていることはありえないという感情的な反発以外に、腐敗は微生物の働きによるものであることを立証したパスツールの「自然発生説の検討」がまだ発表されておらず、病気の原因は汚れた空気であるとするミアズマ説が主流であった。このような当時の常識からすれば、産褥熱の原因を「死体の粒子」とすることは荒唐無稽にしか考えられなかったのであろう。伝染病には「生きた伝染源 (コンタギオン)」が存在する、というコンタギオン説がイタリアの科学者フラカストロ (Girolamo Fracastoro, 1478-1553) により提唱されていたにもかかわらず、ミアズマ説を凌駕するには至っていなかったのである。常識に因わず自己の観察に基づいて仮説をたて、その仮説に従って、権威に怯むことなく行動したセンメルワイスに脱帽である。 (久)